

安曇野市公民館報

安曇野市
中央公民館
No.2
TEL62-4565

第5回安曇野市公民館大会開催

5月22日(日)第5回安曇野市公民館大会が豊科公民館ホールにて開催された。生憎の雨模様天候であったが、約350名の公民館関係者が参加し研修が行われ、大会中、地区公民館活動に尽力された、豊科大口沢地区公民館の高橋道明元主事、穂高柏原地区公民館の武田光弘元公民館長、三郷野沢地区公民館の松村浄元文化部長、三郷及木地区公民館の福嶋勇一元文化部長が功労者表彰を受賞した。



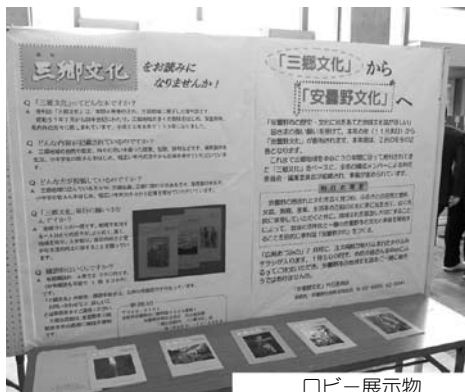
受賞者あいさつ 元柏原地区公民館長 武田光弘氏

記念講演会では、小布施町(株)榎一市村酒造場代表取締役のセーラ・マリ・カミングスさんに「自ら取り組む地域おこし」と題して講演いただいた。講師は関西外国語大学に交換留学生として来日している。長野オリンピック準備ボランティアを務めた後、より日本に魅せられ、株式会社小布施堂に入社したという経歴を持つ。講演の中では小布施と安曇野には共に新しい人を受け入れる土壌があることに触れられた。また、まず自分がわくわくすることを見つけ、始めることが重要であり、そのことによって大勢の人たちにわくわく感が波及し、地域おこしに

平成22年度穂高西小学校6年3組(春日三千郎教諭)では、DVD「矢原堰白井弥三郎物語」を製作した。白井弥三郎は1600年代穂高矢原の庄屋の家に生れた。当時矢原地区は稲作に十分な水を確保することができず、庄屋の弥三郎は農民の苦しみを一身に背負

DVD「矢原堰白井弥三郎物語」完成

っていた。松本藩の政策で始めた開削工事は一向に結果が出ずに、計画自体が頓挫していた。弥三郎は藩主水野忠職(みずのただもと)に疎水の許可を願いだした。はりつけの刑を覚悟した再三の願い出の後、工事の再開が認められ、苦勞の末弥三郎堰(矢原堰)の開削に



コピー展示物

つながっていくと語られた。日本の伝統・文化が失われていくことを日本人以上に懸念し、言葉の端々から再構築の意識が伝わった。地区公民館の活動事例発表では、三郷楡地区公民館と、明科上押野地区公民館の発表が行われた。各種事業を展開する中で、区に入らない未加入世帯が増加しているという問題点や、少子高齢化による他団体との連携の必要性が語られた。



水が流れ始めた矢原堰

6年3組では、5年時に地域学習講演会で烏川扇状地について学習した。クラスに白井弥三郎の末裔に当たる児童が在籍していたことも関係し、関係者からの取材や、6年時の6月には矢原堰の源流まで歩いて現地学習を行った。学習のまとめとして、春日教諭より映画製作の提案があり、12月に台本完成、1月から3月にかけて収録を行った。児童たちは、当時の農民の身なりを再現するため、各自家から着物を持ち寄り、かつらは自分たちで製作した。寒い時期の取り組みであったが、裸足で撮影に臨み、出演者から裏方までクラス一丸となつて約1時間の作品を完成させた。



はりつけ柱と弥三郎

至った。

公民館事業紹介

② 穂高公民館

市内5地域の公民館活動を順次ご紹介いたします。第2回目は穂高公民館の活動についてです。

穂高公民館は、地域の人達みんなの学習の場、憩いの場、交流活動の場として、楽しく親しみやすい公民館を目指し事業を行っています。

穂高公民館入口には、穂高文化協会の皆さんにご協力をいただき、作品の展示を行っています。この展示は毎月作品内容が変わり、来館者の楽しみにもなっています。



穂高会館口ピー展示

今回は今年度に行った事業を幾つかご紹介いたします。

地区公民館役員研修会

1年で役員が代わる地区が多いため、4月22日に第1回目の地区公民館役員研修を行いました。1回目としては、公民館活動を知っていただく為に「まちづくり



柏原地区公民館長事例発表

はひとつづくり」と題して穂高公民館長の講演と、柏原地区公民館長による館報「ふれあい常念」の作成について、苦労した話等を含め事例発表をしていただきました。参加された役員の方からは、他地区の公民館活動を聞く機会となり参考になった等のご意見をいただきました。

穂高公民館講座

今年も穂高公民館講座として幾つかの講座を計画しました。今年最初の講座として5月18日に、環境を考える講座「簡単！段



環境を考える講座

ボール箱で堆肥づくり」を開催し、生ごみを利用して堆肥作りを行いました。以前、広報でも紹介された今注目の方法で、生ごみを減らし、出来た堆肥は家庭菜園などに使えるので一石二鳥です。一度作れば生ごみを入れてかき混ぜるだけで、処理も簡単で、参加された皆さんは、熱心に取り組まれ、早速、帰って試してみたい等、感想をいただきました。

5月21日には、ふるさと体験学習「春の里山トレッキング」と題して地元の富士尾山周辺の木々や



春の里山トレッキング

草花、野鳥などを観察しながらトレッキングを行いました。今回は、触れ合いを目的に子どもから大人まで、32名が参加し、好天気の中、楽しく1日を過ごしました。途中では、ヤマブキ、ヤマツツジ、イワカガミ、コシアブ



イワカガミ



ミツバツツジ

ラ、ミズナラ等の植物を観察し、中には野鳥のヒガラの巣入りを間近で見ることが出来た参加者も居て、とても感動をしていました。

今年度も穂高公民館は、様々な講座等を計画し、皆様と一緒に活動をしていきます。

グループ紹介

光菊花クラブ

会長 内川 郁夫

1 誕生と主な歩み

「自分たちもあんな素晴らしい菊を作りたい、本当にできるだろうか」という夢と期待と、不安の菊作りが始まったのは、今から30数年前で当時の光区野田公民館の教室として出発しました。

当初は女性数名を含め、40数名を超える参加がありました。用具も揃わず、鉢の代わりに古バケツ、支柱は細竹というものでしたが、秋には期待したとおりの大輪を咲かせることができました。それから土作り、施肥、灌水等奥の深さに引き込まれて、今日に至っています。

その後、技術は徐々に向上し、町や市の文化祭で賞をいただくことが多くなりました。会員の中には総理大臣賞をいただくまでに向上された方もいます。



豊科地域文化祭にて

2 年間の主な活動と行事

育成途中は大輪、懸崖等のそれぞれの師匠的な方を訪ねて教えるだけでなくということをやっています。

平成4年に光区公民館で始まった光菊花展は、今年で20回目を迎えます。それぞれの部門を審査してもらい、豊科公民館から入賞者に表彰していただいています。光区写真展も同時に開催し、区の文化祭的位置づけで、区民に鑑賞し

古きを尋ねて

② 「馬鍬」(こんべと)

安曇野市は、昔から有数の米どころであった。至るところに、堰をつくり、水を引き、稲作を行っていた。拾ヶ堰はその代表の最たるものである。現在の米づくりは、殆どが機械化され、人力や牛馬の力に頼らなくても出来るが、昭和30年代後半頃までは、人力と牛馬の力で作っていた。土を起した田圃に水をかけ、土を柔らかくして、苗が植えられるように整地するために使われたのが「馬鍬」である。「馬鍬」を牛や馬に牽かせ、車軸についている鉄の歯で土を柔らかくした。従って農家では必ず、牛や馬を飼っていたものである。昭和30年代まで使われていたが、耕運機やトラクターが普及し

ていただき、親しまれています。

3 豊科公民館活動への参加

① 「楽しい菊作り講座」

講座開設以来、受講者へ苗の提供や、実地学習の見学場所を何箇所か提供するなど、会員が一体となってお手伝いをしています。

② 豊科地域文化祭へ出展

豊科地域の菊愛好家を中心となつて組織している文化祭実行委員会のメンバーと

だしてから、牛や馬と共に、使用されなくなった。安曇平で何故この農具を「こんべと」といったのかは定かではない。この地方の独特な呼び方だろうと思われるが、お菓子の金平糖についているゴツゴツした角に似通っていることから「こんべと」と呼んだとも考え



馬鍬 (こんべと)

られる。

この「こんべと」で、あらふみ(荒代)・こつぶし(中代)・しろごせ(植代)と3回に分けて水田

を掻き回して整地した。これを代掻きと言った。

③ 菊作り先進地への研修会参加
より高いレベルの作品を観て次年度へのステップにしよう、多くの会員が参加しています。

して、運搬・飾りつけの準備や片付けに全員で協力しています。大輪や懸崖等の出品数は毎年百数十点を超え、多くの入賞者を出し、更に何人かは部門で高位受賞を果たしています。

当時は性能の良い機械も無かったため、田を深く起せず「こんべと」にある程度の重さをかけないと、なかなか土が深く軟らかに整地ができなかった。そこで人間が「こんべと」に乗り、体重で重さがかせいだ、牛や馬はその分大変で、時々田圃の中で立ち往生してしまい、それを手綱で叩いて動かすのに苦労した。現在では、田おこしや代掻きは、トラクターで短時間に行われるが、牛や馬が行うには1反部(300㎡)の田圃の土を起して整地するまでには、延べにして4〜5日位かかった。

今では米作は機械化され、手が掛からないほうであるが、当時は質のよい米を作るには、非常に多くの手間を要した。

地区公民館だより

中村・金井沢地区公民館

私達の中村・金井沢地区は、安曇野市の北端に近く生坂村や池田町と隣接しています。東に犀川の流れ、西に塚田山の山並みを背負い明科地域でも気候の良い所といわれています。中村地区58戸、金井沢地区9戸と小さな地区公民館です。



塚田山と中村地区

例に洩れず私達の地区でも少子高齢化が進んでいて、本年度の新入学児童は1人で非常に寂しく感じます。そんな中、公民館内には、詩吟、俳句、踊り、大正琴そしてマレットゴルフ、オカリナと6クラブが活動しています。高齢化が加速しクラブ員の数が減少する中頑張っています。地区の敬老会には芸能発表も兼ね余興として参加もしています。趣味の多様化と日々の忙しさで、ある程度の年



敬老会にて

齢まで参加する余裕が出来ないのかとも思っています。地区の親睦や自己啓発の意味でも、多くの方が参加できる方法を考える時期が来ていると感じています。



体育祭 つなぎ競技

地域行事の体育祭(市民運動会)の選手選考は、区長、組長、青少年育成会長等々地区一体となって選手を推薦しますが、メンバー集

めには苦勞をしています。当日は、休憩所での和やかな雰囲気と召集所で緊張の中の作戦立て、励まし合いなど全員が一致団結して参加します。昨年は4位、一昨年は準優勝と輝かしい成績を残していますが、その力となっていないのは、気心の知れた仲間同士の付き合いが日頃出来ているからではないで

私は一生懸命

三郷郷土研究会は、昭和57年、三郷地域の自然と歴史・文化を研究し、郷土の文化の向上に資することを願い、『三郷村誌I』の編纂に関わった者を中心に結成されました。

会では、研究発表会をはじめ、講演会や視察などを行ってきました。平成8年、『三郷村誌II』の編纂が始まり、その後編纂関係者が会に加入し、調査研究活動が充実してきました。最近では、古文書・石仏・民話・村誌を読む・ホタル・古城・堰の7つのテーマによるグループ活動も自目的に行っています。

また、会では季刊誌「三郷文化」を、発足以来30年にわたり、教育委員会と協力して発行してきました。昨年度は、郷土の大先輩、務台理作先生の生誕120周年の記念事業の一つとして、4回にわたって先生の生

しょうか。

小さな地区公民館には小さいなりに良い所が沢山あります。公民館活動は、地域の特性を生かし、自然体で地域に根を張り、追風の吹くが如く進めたいものです。

(中村・金井沢地区公民館長
小林富士夫)



三郷郷土研究会
会長 曾根原孝和

涯や思想を伝える特集を組みました。事業では他に小宮山恵三郎先生の講演「務台理作の哲学と信州」も行いました。

今年度の総会では、会員の木船 清さんの「室山の成立を考える」の講演で、安曇野の地形や地震の発生など、時宜を得た話を聞き学び合いました。

なお、116号に達した「三郷文化」は、本年度秋から「安曇野文化」と改称し、市内全域の自然や歴史・文化全般に光を当て編集・刊行していくことになりました。今後より多くの市民の皆様が親しんでいただけるよう願っています。